

令和5年度（2023年度） 第1回横須賀市政策推進・行政評価委員会会議 会議

- 日 時 令和5年（2023年）8月1日（火）14時00分～16時00分
- 場 所 横須賀市役所本館3号館5階正庁
- 出席者 【委員】  
高見沢委員長、藤枝委員長職務代理者、  
岡本委員、笥委員、菊池委員、久保内委員、篠原委員、須藤委員、多田委員、  
中澤委員、馬場委員（50音順）  
（欠席：菊地委員）
- 【事務局】  
宮川経営企画部長、吉田都市戦略課長、佐野主査、小坪
- 傍聴者 1名
- 資 料 資料1 委員名簿  
資料2 横須賀市の人口の動向  
資料3 横須賀市のまちづくりの戦略  
資料4 地方創生関係交付金事業の事業進捗  
資料5 地方創生臨時交付金事業（コロナ交付金）の事業結果
- 議事内容 市が考える「まちづくりの戦略」の推進について
- ・ 説 明 横須賀の人口の動向
  - ・ 議事1 横須賀の人口（定住人口・交流人口・関係人口）の創出

## 議題 市が考える「まちづくりの戦略」の推進について

### 「横須賀の人口の動向」についての質疑等 ※関係資料：資料2

(中澤委員)

- ・ 2015年に社会増が生じているのはなぜか。

(事務局) 吉田課長

- ・ 2015年前後に、追浜や中央を中心に、マンション開発が行われ、1,000戸を超える住宅供給があったことが要因と考えられる。

(久保内委員)

- ・ 自市内就業比率が高いのは、意外だった。横須賀はベッドタウンになっていて、市外に働きに行っていると思っていた。
- ・ 自市内就業比率が高い要因は何か。農業や漁業が多いのか。

(事務局) 吉田課長

- ・ 自衛隊などの公務員が多いことが要因になっている。

(馬場委員)

- ・ 横須賀出身で、現在は都内に住んでいる。
- ・ 小学校の同窓会では、半数くらいが横須賀在住で、家業を継いでいる人が多かった。
- ・ 横須賀に住み続けたいと思っている人が割と多いと感じる。

(菊池委員)

- ・ 若い人は出て行く人が多いが、横須賀で働くことを決めた人は、定着率が高いと感じる。
- ・ また、横須賀で働く人は、離職率が低いようにも感じている。結果的に高齢化にもなりやすいが。

(筧委員)

- ・ 私が川崎から横須賀に移住してきた理由は、母と同居するために、少し広い家を探していたところ、横須賀が、住宅が広く、比較的安価であったからである。今では環境を含め、とても住みやすい。
- ・ 一旦は、独立して市外に出た子ども達も、現在は実家近く（同じマンション）に戻ってきた。その理由は、実家で孫を預かり保育園代わりになるためである。

(菊池委員)

- ・ 社会増減は、自然増減よりも意思の介在が大きく、政策を講じることができる分野。
- ・ 20～30歳の女性の人口が減っているとの資料もある。女性の社会増減の数は、自然増減に関係してくる。その年代の女性が転出している分析が必要ではないか。
- ・ 日本全体が人口減少に進むなか、都市間競争がより一層顕著になると思われる。自分のまちは、どこに焦点を当てるべきか、何に力を入れているのか、市内外にとって分かりやすい政策が必要。
- ・ たとえば、大企業の誘致などは難しいかもしれないが、今は、起業しやすい時代。「個性を生かしてビジネスを生み出すまち」というのも考えられる。
- ・ 市民アンケートで、転出意向の上位理由に「これまでと違う環境で暮らしたい」がある。この理由には、違う環境で自分を高めたいという前向きな理由と、横須賀が廃れているから違う環境に行きたいといった後向きな理由の両方が考えられる。これは、特に若い人たちの回答ではないかと思う。この理由の違いは大きいので、より細かに分析する必要があるのではないか。
- ・ 中心市街地の三笠ビル商店街では、2～3年前はなかった空き店舗が発生して、市場価値が下がっていることを如実に表している。市場価値は、都市のエネルギーであり、これをいかに維持していくかを考えることも重要。

(岡本委員)

- ・ 2時間かけて大学に通っている。
- ・ 横須賀は大好きだが、横須賀にとどまらなくてはならない理由はない。
- ・ 菊池委員のご指摘のように子育て世帯、特にこれから子育てをしよう、家を持つとする人たちに対して、横須賀に住むと、「こんな子育て支援が受けられる」「こういうメリットがある」といったことをわかりやすく示すことが、横須賀に住もうという決め手になるのではないか。

(高見沢委員長)

- ・ すでに住んでいる人は、一時期横須賀を離れて、戻ってきた人が多いように感じる。
- ・ 逆に、東京をやめて、初めて横須賀に住もうという人はいないということか。

(事務局) 佐野

- ・ 東京からの転入者アンケートで、「これまでの横須賀市との関わり」を調査し、その結果からも、地縁・血縁が、強く転入に関連していることがみとれる。

(馬場委員)

- ・ 横須賀から勤務地まで1時間。居住地としては許容範囲。
- ・ 半島は災害が不安で、道が寸断されたら孤立するのではないかとといったライフラインに対する不安や、海が近いので津波に対する不安も払拭しがたい。
- ・ 市で災害対策がしっかり行うこと、それを伝えることが大切。

(岡本委員)

- ・ 横須賀に住むイメージが湧かない人も多い。
- ・ 体感モニターツアーのようなものをもう一度やってもいいのではないかと。

(篠原委員)

- ・ 市民アンケートの転出意向にある「市全体が衰退しているイメージがある」は深刻。イメージの転換させることは非常に難しい。
- ・ 西では、小田原も同様の課題を持っている。
- ・ 通勤通学といったところは、行政の手の打ちようがないが、イメージの転換は難しいが、行政が努力できるところ。
- ・ 横浜の野毛は、一時期衰退していたが、ここ数年は非常ににぎわっている。若い人が経営する飲食店が増えているのが要因ではないかと。

(寛委員)

- ・ 飲み屋など飲食店が元気でないと活気が感じられない。
- ・ イベントや仕事帰りに、飲み屋さんなどに立ち寄るといった流れがうまれる。
- ・ 大きなイベントの開催や、企業誘致に力をいれてほしい。

(馬場委員)

- ・ 新潟市に沼垂テラス商店街がある。シャッター街の港町だった古くからの町が、昭和レトロな街並みを残しつつも新しく生まれ変わり、活気を取り戻している。
- ・ 住民主導で行い、金融機関もお金を貸していることがポイント。
- ・ 市がやらずとも、内側から、やりたいという気持ちを醸成するのが大切ではないかと。

(高見沢委員長)

- ・ 沼垂テラス商店街は、その地にゆかりのある人が関わって進めた。
- ・ 商店街全体のリニューアルは、権利関係が難しいので、想いのある人が権利を買い整理したのち、場所を貸し出すといった方法をとっている。

## 議事 1 横須賀の人口（定住人口・交流人口・関係人口）の創出

※関係資料：資料 3

（須藤委員）

- ・ 戸塚在住だが、戸塚から横須賀に来るには、JR は本数が少なく京急を使うことなる。
- ・ 主たる路線が 2 本あるが、基本的に 1 本しか使えず、個人的には、横須賀線（JR）は、実質逗子までと感じている。
- ・ 関東の通勤は、基本的に JR 利用で、そこが通勤圏。
- ・ 横須賀の JR 駅周辺（久里浜や衣笠）は、ノスタルジック感が出ており、住宅の選択肢として考えにくい。
- ・ 横須賀が通勤圏として見てもらえるように、本腰をいれて JR と協議をするのが重要。

（筧委員）

- ・ 利用できる路線が 2 本あり、片方に何かあったときに、もう一方を利用でき、その点からポジティブに捉えている。
- ・ JR の駅周辺で開発があれば、なお嬉しい。

（事務局） 宮川部長

- ・ JR と定期的に話し合いの場を設けているが、利用者が少ないため、積極的な投資は難しいと言われている。
- ・ 久里浜には、マリノスの練習場ができたので、京急と JR の両社と乗降客数を増やすため、検討を進めている。

（多田委員）

- ・ 東京 23 区アンケート結果をみると、仕事や住宅、生活の事情で致し方なく横須賀に引っ越してきているとも読み取れるのではないかな。
- ・ イベントがあるから、横須賀に引っ越してきたとは読み取れない。
- ・ イベントは、一時的な経済効果としては重要だと思うが、定住につながる抜本的な解決方法にはならないのではないかな。

（事務局） 吉田課長

- ・ まずは、知ってもらうことから始まる。観光は、横須賀を知ってもらうきっかけづくりと考えている。定期的に、イベントを開催することで、横須賀の認知が広がると考える。
- ・ 東京は住宅価格が高騰し、家を持つことが非常に困難。一方、横須賀の住

宅は、比較的広くて安い。そこに魅力を感じて引っ越してくるファミリー層が一定数いるのは事実。

(中澤委員)

- ・ 横須賀にしかない魅力的な職場や仕事があれば、横須賀で働きたい人が増え、定住人口が増えるのではないか。
- ・ BMX や e-スポーツなども良いが、それに関わる産業や雇用があるのか。

(事務局) 宮川部長

- ・ 今は、市の魅力を創出し、横須賀のイメージアップにつながる取り組みに力を入れている。
- ・ 今の取り組みの先に、産業や雇用が創出されると考える。

(菊池委員)

- ・ そこに住んでいる人（定住人口）と住んでいない人（交流人口や関係人口）は、次元が違い、異なるものとして考えなくてはならない。
- ・ 自分の住んでいるところのないものを求めてやってくる人が交流人口で、地域活性化の触媒となってくれる人が関係人口。
- ・ 一方、住んでいる人にとっては、ライフスタイルや現実的な生活が選択基準となる。
- ・ 定住人口と交流人口・関係人口は、別物として理解し、それぞれに対してどんな政策を打つか明確にして、全体的関連性を構築にするべき。
- ・ イベントをやっただけでは、一過性のものとなり、住んでいる人にとって、長期的メリットとするためには先を見据えた取り組みが必要。
- ・ 例えば、BMX のイベントをやって、子どもたちが夢を持ったとしても、育てる手段がないと、将来につながらない。
- ・ 先ほど、岡本委員の発言にもあったように子育ては重要だと感じる。事件に巻き込まれるなど、子どもたちが一番大変な思いをしていると感じる。「子どもたちにとって一番安全な街」と、はっきり明確な政策を打ち出すことによって、三世代が定着する街になるかもしれない。
- ・ 横須賀市が子育て政策を十分に行っていることを、私は知っている。しかし利用者しか知らないのではないか。横須賀市に住んでいるファミリー層が、横須賀市に住んでいるステイタスとして、享受できていないのではないか。横須賀の政策を市内に知ってもらい、外にも発信していくことが大切。

(岡本委員)

- ・ 横須賀は、東京から1時間くらいで往復が可能で、東京に近くリソースもそろっている。
- ・ そこまで廃れていない横須賀は、地方創生に興味のある学生にはちょうどよく、ある意味ベストロケーション。
- ・ 地方創生を学んでいる学生を引っ張ってくるような取り組みも良いのではないか。

(藤枝委員)

- ・ 今から20年前から日本の人口は減っていくと言われていた。
- ・ 横須賀のまちづくり戦略は、手堅く安定したモデル。
- ・ イメージは、人それぞれ違う。市民が感じる「衰退している」イメージを分解して、分析できると、どこにアプローチすることが必要か、さらに深い議論ができる。
- ・ 今の社会は、どんな体験ができるのか、それにより自分は成長できるかを重視する。横須賀は、首都圏内でこのロケーション。プロスポーツチームと絡めて、子どもたちのスポーツ大会を開催するのもよいのではないか。大会に参加することで、一定期間ファミリーが横須賀に滞在し、プロ選手との交流といった貴重な体験もできる。

(篠原委員)

- ・ リピーターになることが、一番のハードル。
- ・ 見るだけでなく、体験して、人と交流して、関係を築くことが大切。
- ・ 横須賀は、マリノス、ベイスターズ、漁業・農業、エンタメや文化もある。見るだけでなく体験や交流の工夫もできるのではないかな。
- ・ あまり知られていない西海岸のブランドを高めるのも有効ではないかな。

(寛委員)

- ・ 菊池委員や岡本委員と同様に、子育て支援が重要。
- ・ 「そんなに横須賀の子育て支援が充実しているのなら、横須賀に移住しよう。」と思えるような、思い切った子育て政策をお願いしたい。(給食費、医療費の無償化など)

(馬場委員)

- ・ 横須賀は、宿泊施設が圧倒的に不足している。
- ・ 一日遊んで、日帰りで帰れる距離。
- ・ グランピングや空き家での宿泊など、横須賀に泊まりたくなる宿泊施設があるといい。
- ・ 日帰りで帰らない工夫が必要。滞在時間を延ばし、存分に横須賀を満喫してもらおう工夫があるといい。

(須藤委員) 追加意見

- ・ 横須賀市に近い人口規模で転入者が増加した自治体の例として奈良市（人口 35 万人、大阪都心から電車で 1 時間弱）があるので、取り組みが参考になると考えられる。
- ・ 奈良市は 2015 年まで転出超過の一途をたどっていたが、2019 年には転入者が転出者数を上回った。
- ・ 同市では 30、40 代の転入者を増やすために、下記の施策に取り組んでいる。
- ・ また、独自の子育て支援策に取り組んでおり、民間調査の子育てしやすい街ランキングなどにも上位に入っている。
- ・ 課題や行政の規模からも横須賀市の参考になりそうな自治体なのでご紹介する。

**【奈良市の施策】**

オンライン移住相談、お試し移住制度、広報大使を公募、ふるさと納税事業者の発信を公募、奈良市の学生の活動を支援食の PR、古民家の活用

- ・ また県内で転入者の多い藤沢市職員にヒアリングしたところ、藤沢市に転入者が増えたきっかけは、子育て支援策の拡充とその PR とのことであった。
- ・ 当然、他の施策もあったが、子育て支援が一番効果があったのでは、という意見であった。
- ・ あくまで当行に出向している藤沢市職員個人の意見だが、ご紹介する。

以上